

茶路川筋のアイヌ語地名

第9回

○イルオベツ

「イルオベツ」は、国道392号が二股へと上って行く坂の途中、左側に見える川の名前です。地図では「イロベツ川」と記されています。

「イ(熊)・ル(足あと)・オ(ある)・ベツ(川)」と言う意味で、白糠地名研究会は「熊の足跡の見られる川」としています。また、明治時代のアイヌ語研究者永田方正も『北海道蝦夷語地名解』で「熊路ノ川」と訳し、「ア

イヌ云 神居ル處ナリト 神八則チ 熊ヲ云フ」と説明しています。

○コイカタホルカチャロ(川)

「コイカタホルカチャロ川」は、「コイカ(東)・タ(で)・ホルカ(逆さ・反対)・チャロベツ(茶路川)」という意味があり、「東方にあつて逆流する茶路川」と訳されています。

白糠地名研究会は、この川は「二股から右股を経て、まっすぐ北にむかつてのびる茶路川の本

流」のことを言い「右股あたりで大きくホルカしている」と述べています。

「ホルカ」については、川がUターンするように後戻りしていることを表す場合と、支流が方向を変えている場合とがあるようですが、地名研究会は「北にむかうと思えば途中で南下し、再び方向を転じて北にむかうというように逆もどりすることをいう」と、川の蛇行を説明しています。

確かに地図を見ると、茶路川は右股でかなり蛇行していますので、その様子から「ホルカ」という名が付いたのだと思います。

○ルークシチャロ(川)

「ルークシチャロ川」は、二股の西の方から茶路川に流れている川です。「ル(道)・クシ(通る)・チャロ(茶路川)」という意味があり「茶路川に沿って道が通じている」と訳されています。

以前、海岸筋のアイヌ語地名の中で、茶路川には古くから十勝の内陸や網走へ通じる交通路の役割があつたことから、その道の入口である川口を意味する「チャロ」という名が付いたことを紹介しました。その延長がこの「ルークシチャロ」と言うことです。

●海と山のシラリカを結ぶ道
ルークシチャロ川の道を山越えすると足寄町に入ります。

足寄町(郡)は、昭和23年に十勝支庁の所屬となるまでは、松前藩時代はクスリ場所、明治時代以降は釧路国、釧路支庁に属していました。

アイヌ語地名研究家の山田秀三は『北海道のアイヌ語地名』で、「足寄郡が釧路国の中に入れられていたのは、そこが釧路アイヌの居住地であつたからで、白糠系の人たちの住地だつたらしい」と記しています。このことから、茶路川は、海と山のシラリカコタンをつなぐ大切な道であつたことがわかります。



ルークシチャロ川